

訪中団(深圳・香港)の現地報告

～賃金上昇による外資企業の苦境をめぐって～

今年の訪中団は中国南部の広東省(深圳、東莞)そして香港へ(11月5日～9日、総勢18名)。日中12月例会では訪中団初参加となる2名による報告会となりました。

(12月3日：大阪産業創造館にて)



▲例会風景

□ 金津智俊氏〈(株)カナツ加工〉の報告から

経済特区が設置されてから「時間は金銭・効率は命」を理念に掲げてきた深圳。高層ビル群に驚く一方、「ここは中国だな」という印象を持ったのは青い空を一度も見るができなかったこと。原材料を輸入し、中国の安い人件費で加工して輸出するビジネスモデル「来料加工」も期限の延長が認められておらず、曲がり角だ。我々が見学した「財布工場」が象徴的だった。中国の人件費がどんどん上がったためミャンマーへの移転を準備中だ。今後は何を魅力に中国で会社を運営していくのか、課題だと思う。

大規模なゴルフリゾート(全216ホールの超巨大コース)を見学し、中国の底力を感じた。もはや世界の工場というよりも大国だと思った。



▲報告者 野村さん(左) 金津さん(右)

□ 野村明宏さん〈(株)電研社〉の報告から

同友会の訪中団は現地の苦労話を生で聞けるなど、一般的な視察ツアーとは違う深いものと驚いた。

実際に中国と取引したこともあるが、人が長続きしていない。少しでも賃金が高ければ別の工場へ移る。それが今回聞いた話で腑に落ちた。「日本は経済危機を乗り越えて上がり下がりを経験した。一方、中国は改革開放以後ずっと右肩上がり。落ちることを知らない。今日より明日、自分を含めて国は良くなると信じている。だから高賃金を求めて移る」というもの。日本も戦後はそうだったのかもしれない。

「ひと旗揚げよう」「頑張ろう」「いい暮らしを」というエネルギーたるや単なる経済力では測れない。それがあの膨大な人口で集まっている。中国は将来さらにすごい国になっていくのかも知れない。

一方、お金ばかりの話は疲れる。安い人件費を求めて他国に移転する外資。そこでも賃金は上がり、また次を探すことに。そこに経営の楽しみ、ワクワク感はあるのだろうか。インセンティブ、動機づけはお金だけなのだろうか。

質疑応答にて＝会場からの意見も含めて

・人件費の高騰について

「結局は繰り返す。『ベトナムではもうやっていけない』というベトナム進出企業の話も聞く」「沿岸部の深圳から何百キロも内陸に行けばベトナム、ミャンマーのようなところもあるのではないかと。ベトナムはインフラなどにデメリットがある」「現地の経営者から『賃金が上がって高いものが売れる。賃金上昇大歓迎』という声を聞いた」「単純作業は中国ではもうダメ。一人っ子政策で将来人口は減る」

・同友会理念からみて

「低賃金を求める経営者は『自分では』住みたくもないような末端』に行くしかないという話を聞いた。同友会の言う『人を大切に経営』とは相容れない」「経済発展とともに企業も成長して『よい経営環境』になるだろうか」「中国ではまだ同友会的な考えが浸透する時期ではない。日本人もバブル期にどう考えていただろうか。頭を打ってお金以外のもの、大事なものに気づいたのではないかと」

現地視察による生々しい報告を元に、活発な議論が尽きない例会になりました。

文：坂元鋼材(株) 坂元 正三